

国包まち歩き ～ふれあい小径 完成記念ウォーク

2026年7月11日

三木鉄道の歴史は、大正 5 年（1916 年）に播州鉄道が厄神駅から別所駅までを開業したことに始まります。翌大正 6 年（1917 年）には三木駅まで延伸され、美囊川の舟運に代わる交通機関として、また三木の金物産業を支える貨物輸送路として重要な役割を果たしました。その後、大正 12 年（1923 年）に播丹鉄道へ譲渡され、昭和 18 年（1943 年）の戦時買収により国有化されて、国鉄三木線となりました。

高度経済成長期に入ると、自動車の普及や道路網の整備により利用者は減少し、昭和 41 年（1966 年）をピークに乗客数は下降を続けました。さらに昭和 47 年（1972 年）

には貨物輸送も廃止され、経営は厳しさを増していきます。昭和 55 年（1980 年）の国鉄再建法制定を受け、三木線は特定地方交通線の第一次廃止対象路線に指定されました。

地域の公共交通を守るため、兵庫県や三木市などが出資する第三セクター方式による「三木鉄道株式会社」が設立され、昭和 60 年（1985 年）4 月、国鉄三木線は「三木鉄道三木線」として新たなスタートを切りました。新駅の設置やイベント列車の運行など利用促進策も積極的に行われ、一時は地域住民に親しまれる鉄道として再生への努力が続けられました。

しかし、自家用車への依存が進み、神戸方面への交通では神戸電鉄との競合もあって利用者の減少に歯止めはかかりませんでした。慢性的な赤字が続く中、三木市の財政負担も大きな課題となり、平成 19 年（2007 年）に廃止が決定されます。そして平成 20 年（2008 年）3 月 31 日、三木鉄道は最後の運行を終え、播州鉄道時代から数えて 92 年に

及ぶ鉄道の歴史に幕を下ろしました。

現在、線路跡の一部は遊歩道「ふれあい小径」や「別所ゆめ街道」として整備され、駅舎や鉄道遺構も各地に残されています。これらは、かつて地域の産業や人々の暮らしを支えた鉄道の記憶を今に伝える貴重な地域資産となっています。

「ふれあい小径」(500メートル)は、旧三木鉄道の廃線跡を地域の貴重な資産として次世代へ引き継ぎ、人と人、人と自然をつなぐ憩いの空間として整備された遊歩道です。構想の立ち上げから完成まで約6年。その間、地域住民をはじめ、関係団体、加古川市などが幾度となく協議を重ね、安全性や景観、利便性に配慮しながら計画を進めてきました。そして令和8年7月11日、多くの人々の思いが結実し、「ふれあい小径」が開通の日を迎えました。この小径が、旧三木鉄道の歴史を伝えるとともに、地域の交流や健康づくり、自然とのふれあいの場として末永く親しまれることが期待されています。



国包まち歩き

～ 「ふれあい小径」完成記念ウォーク ～

令和8年7月11日(土)



国包地区の懐かしい面影

～ 懐かしさと共に時の流れを感じよう ～

国包の鉄橋



出典：
『加古川・高砂の昭和』
(福林舎)

国包駅舎



提供：中島 元虎氏
(三木市)

ディーゼル気動車



提供：藤原 尚恵氏
(加古川市国包)



【主催】
・国包地区
まちづくり協議会
・国包町内会

【本紙作成】福岡賢大

国包まち歩き

～ 「ふれあい小径」完成記念ウォーク ～ 令和8年7月11日(土)

国包地区の名所・名勝

① 加古川北防災ふれあいセンター

以前、国包公民館と公園があった所に、2004(平成16)年3月に「加古川北防災ふれあいセンター」として建てられた。地域住民の集會・研修などのコミュニティ活動の場、防災資機材の備蓄、災害時の災害対策活動拠点として多目的に利用される防災コミュニティ施設である。
当センター前には「国包ふれあい公園」があり、2025(令和7)年4月、災害時の一時避難場所や地域のイベントにも活用できる大きな広場として新設された。

② セイメイさん

冠神駅を作る際に掘り出された鐘、安徳清明(あへのせいめい)の術がかかっているという言い伝えがあり、セイメイさんと呼ばれるようになった。また、青番(セイメン)(青番金菊)(せいめいにんこう)さん、と呼ばれていたという説もある。どんな病気を治してくれると言われており、古くにはマムシ除けの神様として大切にされていたという。

③ 国包の鉄橋(わがまち加古川70選)

JR加古川線の巨神駅から市電駅の間の加古川にかかる、長さ333mの鉄橋。1913(大正2)年、当時の播州鉄道が開業し、橋梁の中央部は1983(昭和58)年の集中豪雨によって被災したが1986(昭和61)年にトラス形式の橋梁へ架け替えられた。時代を越えて愛されるレトロな鉄橋として写真愛好家がよく訪れる。

④ 廃線の踏切跡

三木鉄道の名残として、レールの一部と踏切跡が残っている。

⑤ 築山(つきやま)神社

国包出身の長浜屋新六郎という人が、加古川の水害に悩まされ続ける人々を見かね、私財を投じ、洪水の際に避難できる山を1756(宝暦6)年に完成させた。その山は人々の手で築かれたことから築山と呼ばれ、その頂上に地元の人々が感謝の気持ちと安全への祈りを込めて築山神社を建てたとされている。

⑥ 旧国包駅舎跡地

1916(大正5)年11月、播州鉄道として開通。1943(昭和18)年、播州鉄道の国有化により国鉄三木線の駅となる。1973(昭和48)年、無人駅となり、1976(昭和51)年駅舎改築。

1985(昭和60)年、国鉄から移管し、三木鉄道の駅となる。2008(平成20)年3月、三木鉄道廃止に伴い、廃駅となる。翌年、駅舎の解体作業が完了。

⑦ 亀之井碑

昔からの地域は、田畑が加古川の水面よりも高かったため水利の条件が悪かった。その窮状を救うため、1816(文化13)年、畑平左衛門が美濃川が加古川に注ぎ込む手前から取水する大規模な用水路工事(亀之井用水)を行った。後にこの用水は、国包村・宗佐村・船岡村の畑地を潤すことになった。1854(嘉永7)年、当時の百姓が平左衛門の功績をたたえる記念碑を建てた。

⑧ 湯の山街道

姫路から湯の山(有馬温泉)に至る道を示す。戦国時代、羽柴秀吉が三木の別所攻めの際に、戦費を湯の山の山へ湯治目的で送るために整備したが、江戸時代には参勤交代に利用された。国包は、内陸部と海岸部を結ぶ動脈の役割をもった加古川舟運の拠点であった。













